

万葉集と松浦地方（1/2）

～なんと30首がこの地方に～

「万葉集」は現存するわが国最古の歌集であり、全20巻に4,500余首が収められています。その成立年代は八世紀末（奈良時代末期）または九世紀初期（平安時代初期）といわれています。

作歌の舞台も大和地方を中心に、ほぼ全国に及んでおり、九州のものも少なくありません。

「万葉集」にあげられている肥前国（佐賀県内に限定）に関するものは38首で、松浦地方関係のものが30首あります。

松浦地方関係のものは、玉島川のものや佐用姫をしのんだもの、そして気長足姫（神功皇后）のことが主体ですが、これらは太宰府の官人たちが、松浦に遊んだ時のもので、著名な歌が多くあります。その他に派遣船にのって遠く大陸へ旅する人たちが狛島亭（神集島）で旅愁の心情を詠ったもの、また「松浦船」を詠ったものなどもあり。この地方が風光明媚で古くからの歴史に富み、多くの人々に親しまれ、かつよく知られていた、知られるようになったことを示すものです。

■玉島川周辺の歌 巻5

- ・漁する海人の児どもと人はいへど 見るに知らえぬ良人の子と
- ・玉島のこの川上に家はあれど 君を恥しみ顔さすありき
- ・松浦川川の瀬光り鮎釣ると 立たせる妹が裳の裾濡れぬ
- ・松浦なる玉島川に鮎釣ると 立たせる子らが家路知らずも
- ・遠つ人松浦の川に若鮎釣る 妹が手本をわれこそ巻かめ
- ・若鮎釣る松浦の川の川波の 並にし思はばわれ恋ひめやも
- ・春されば吾家の里の川門には 鮎児さ走る君待ちがてに
- ・松浦川七瀬の淀はよどむとも われはよどまず君をし待たむ
- ・松浦川川の瀬早み紅の 裳の裾濡れて鮎か釣るらむ
- ・人皆の見らむ松浦の玉島を 見ずてやわれは恋ひつつ居らむ
- ・松浦川玉島の浦に若鮎釣る 妹らを見らむ人の羨しさ
- ・君を待つ松浦の浦の娘女らは 常世の国の天娘女かも
- ・帯日売神の命の魚釣らすと 御立たしせりし石を誰見き
- ・白日しも行かぬ松浦路今日行きて 明日は来なむを何か障れる
- ・松浦縣佐用比売の子が領巾振りし 山の名のみや聞きつつ居らむ

■松浦佐用比売の歌 巻5

- ・遠つ人松浦佐用比売夫恋に 領巾振りしより負へる山の名
- ・山の名と言ひ継げとかも佐用比売が この山の上には領巾を振りけむ
- ・万代に語り継げとしこの嶽に 領巾振りけらし松浦佐用比売
- ・海原の沖行く船を帰れとか 領巾振らしけむ松浦佐用比売
- ・行く船を振り留みかね如何ばかり 恋しくありけむ松浦佐用比売
- ・音に聞き目にはいまだ見ず佐用比売が 領巾振りぎとふ君松浦山

～2/2へつづく～

分野 文化

地域 唐津・浜玉

◎地図・写真・統計資料など



玉島神社前にある万葉垂輪石公園には、玉島川を詠んだ歌があります。



大伴旅人ら知識人が好んで訪れた玉島川。浜玉町にある虹の松原万葉の里公園には、当地で詠まれた歌を中心に6基の万葉歌碑が立っています。

（『唐津探訪』より）

◎引用・参考文献（出典）

◆『松浦の万葉』清水静男 著
（財）唐津市文化振興財団

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html

万葉集と松浦地方（2/2）

～なんと30首がこの地方に～

～1/2からつづく～

■遣新羅使の歌 卷15

- ・ 帰り来て見むと思ひしわが屋外の 秋萩薄散りにけむかも
- ・ 君を思い吾が恋ひまきはあらたまの 立つ月毎に避くる日もあらし
- ・ 秋の夜を長みにかあらむ何そこば 眠の寝らえぬも独り寝ればか
- ・ 旅なれば思ひ絶えてもありつれど 家にある妹し思ひがなしも
- ・ あしひきの山飛び越ゆる雁がねは 都に行かば妹に逢ひて来ね
- ・ 足姫御船泊けてけむ松浦の海 妹が待つべき月は経につつ
- ・ 天地の神を祈ひつつ吾待たむ 早来ませ君待たば苦しも

■松浦船の歌 卷7・卷12

- ・ さ夜深けて堀江漕ぐなる松浦船 楫の音高し水脈早みかも
- ・ 松浦舟さわく堀江の水脈早み 楫取る間なく思ほゆるかも

大伴旅人は、神亀5年（728）4月、太宰師（太宰府長官）として筑紫に赴任し、任期中には遙か遠くのこの松浦の地も訪ねました。太宰府の長官がはるばる遠隔の松浦地方まで来たのは、単なる遊行ではなく、鏡山や十坊山、城山の烽（のろし）や防人の巡察、軍事視察を目的とし、ついで民情視察に来たのであろうと考えられます。

松浦地方に来た旅人は鏡山に登り、松浦潟の絶景を愛で、佐用姫をしのんで歌をよみました。

彼が松浦路を踏んだのは恐らく天平2年（730）の春3～4月のことかと思われる。

こよなく松浦河の里乙女らを愛し、松浦路を楽しんだ大伴旅人も天平2年（730）大納言に任ぜられて、帰京の途につきました。

彼は風光にロマンに富んだこの松浦路を都に紹介してくれた最初の人物でしょう。

山上憶良も松浦路をひそかに愛し、憧憬したひとりです。生涯憶良は松浦路を踏まなかったのではないかと考えられますが、旅人やその他の人から松浦の風光や、佐用姫の伝説、神功皇后の年魚釣りの伝説、また玉島川の清流と純情な美しい里乙女の話など聞いて、胸中松浦を慕いあこがれながら、詩情を燃やして松浦に関する歌を詠んでいます。

憶良の歌は彼独特のもので、人情味あふれる現実的で切実な歌が多く、特にかの「貧窮問答」は庶民の貧苦にあえぐ様を詠んだものとして有名です。

筑前「引津の亭」（福岡県糸島郡志摩町）を出港した派遣船は、海上の都合により肥前国松浦郡粕島亭に寄港した。万葉集にみえる「肥前国松浦群粕島亭に船泊の夜はるかに海の波をのそんで旅愁をかきたてた歌」とあるのは「遣新羅使」一行の作歌であるという。すでにこの頃から神集島の湾は派遣船の寄港地となっていたのである。

「松浦船」を主題にした歌が万葉集にのせられているが、他の大伴旅人や山上憶良らの秀歌に比べて、あまり知られていないのが現状である。

この二首とも場所も作者も不明であるが、ともに遣唐使船の官人たちの歌であろうと推察される。

分野 文化

地域 唐津・浜玉

◎地図・写真・統計資料など



神集島に7つある万葉集歌碑のうちの4つ。遣新羅使の一行が故郷をしのんで詠んだ万葉歌が刻まれています。

（唐津市フォトライブラリーより）

◎引用・参考文献（出典）

- ◆『松浦の万葉』清水静男 著
（財）唐津市文化振興財団

◎もっと詳しく知りたい方は

唐津市近代図書館へ
お問い合わせください。

■電話：0955-72-3467

■ホームページ：
http://tosyokan.karatsu-city.jp/hp/cnts_lib/index.html